中国の国産スピリッツ消費、2026年上半期に12%減

IWSRによるとインド産ウイスキーは4%増加。アジア最大の2つの酒類市場で隔たりが広がっている

2026年11月11日（水）



IWSRが11月10日火曜日に発表した最新の市場データによると、中国の国産スピリッツ消費量は2026年上半期に前年同期比12%減少した一方、インドではインド産ウイスキーの消費量が4%増加した。この数字は、世界の酒類業界が一部の大規模経済圏で需要の低迷に直面し、他の市場では成長が続くなか、アジアの主要な2つの蒸留酒市場が大きく異なる道をたどっていることを示している。

データは、世界の飲料用アルコール消費量の76%を占めるとIWSRが説明する21の主要市場を対象にした、2026年上半期の分析に基づく。中国とインドの数字は、2025年上半期から2026年上半期にかけての消費量の変化を示している。IWSRはこれらのカテゴリーについてリットル数やケース数による絶対量を公表しておらず、価格や売上高のデータも示していない。

中国では、国産スピリッツの減少は、報告書で確認されたカテゴリー別の落ち込みのなかでも特に大きかった。IWSRによると、上半期の中国の飲料用アルコール消費量全体は3%減少。ビールが2%減、スティルワインが9%減、国産スピリッツが12%減となり、全体を押し下げた。同社はこのカテゴリーに「ナショナル・スピリッツ」という用語を用いたが、中国産スピリッツ全体や白酒市場全体と同一視してはいない。

対照的に、同期間のインドでは飲料用アルコール消費量全体が10%増加した。IWSRによると、成長をけん引したのは通常のアルコール度数のビール（16%増）、レディ・トゥ・ドリンク（RTD）製品（12%増）、インド産ウイスキー（4%増）だった。インドの数字は、他の大規模市場で消費傾向が変化するなかでも、蒸留酒需要が底堅く推移したことを示唆している。

両国の対照的な動きは、報告書が示す全体的な傾向とも一致する。21市場全体では、飲料用アルコール消費量が2025年上半期比で1%減少した。一方、米国と中国を除くと、残る市場の消費量は全体で1%増加。インド、ブラジル、コロンビア、南アフリカ、英国などの伸びが支えとなった。

中国と米国は世界最大の飲料用アルコール市場であり、この明暗の分かれ方は重要だ。IWSRは、両国の低迷が他の市場の好調を覆い隠していると指摘した。米国でも上半期の飲料用アルコール消費量全体は4%減少し、ビールは4%減、スティルワインは6%減、RTD製品は4%減だった。

IWSRによると、対象市場全体ではいくつかのカテゴリー傾向が見られた。通常のアルコール度数のビールは1%未満の減少、スティルワインは4%減、ナショナル・スピリッツは11%減だった。成長したカテゴリーは、ノンアルコールビール（8%増）、インド産ウイスキー（4%増）、プロセッコ（3%増）だった。

同社は、2026年上半期の結果は依然として酒類生産者にとって厳しい市場環境を示すものの、前年の実績よりは改善したと述べた。同じ21市場における飲料用アルコール消費量全体は、2024年上半期から2025年上半期にかけて2%減少していた。IWSRによると、直近の期間の減少幅が1%に縮小した背景には、7市場で成長が見られたことと、別の6市場で前年より減少幅が小さくなったことがある。

蒸留酒メーカーは、アジアで今後どこに成長の可能性があるかに関わるため、中国とインドの隔たりに注目するだろう。中国の主要なスピリッツカテゴリーが12%減少したことは、長年にわたり世界の酒類企業にとって重要な市場で圧力が続いていることを示す。インド産ウイスキーの4%増は、ビールやRTD製品のより大きな伸びに比べれば控えめだが、国内で重要性が高く、海外からも関心を集めるカテゴリーが引き続き拡大していることを示している。

IWSRは、世界的なアルコール消費の減速について、節酒傾向やGLP-1薬の利用拡大など複数の要因を挙げた。ただし、これらの要因だけでは米国と中国での大幅な減少を十分に説明できないとした。中国については、成長期待の鈍化、不動産危機の長期化、高齢化など、経済状況の悪化を指摘。米国については、関税、インフレ圧力、経済全般の不確実性を挙げた。

IWSRの社長兼マネージングディレクター、マルテン・ロードワイクス氏は発表資料で、2026年上半期には市場別、カテゴリー別に世界の飲料用アルコール消費の動向がさらに分かれたと述べた。節酒は市場の構造的な特徴となりつつある一方、インドやブラジルなどでは成長が続いているという。また、スティルワインや通常のアルコール度数のビールといった規模の大きい既存カテゴリーが飲

料用アルコール全体の数量を押し下げ続ける一方、多くの市場ではRTD製品やノンアルコールビールの伸びが減少の一部を補ったと説明した。

報告書は、中国の国産スピリッツとインドのウイスキーについて四半期別の内訳を示しておらず、2026年上半期を直前の6カ月間と比較してもいない。比較対象は前年同期のみであり、その基準では中国とインドの数字を直接比較できる。

データは、酒類市場の動向がいかに不均一になっているかを浮き彫りにしている。市場規模の面で業界にとって最重要国の一つである中国では、国産スピリッツの2桁減が、ビールやワインの幅広い低迷に拍車をかけた。飲料用アルコール需要全体が大きく伸びたインドでは、ウイスキーが、より急速に成長するビールやRTD製品とともに拡大を続けた。生産者、流通業者、投資家にとって、IWSRの上半期データが示すのは、アジアの2大消費市場が異なる方向に向かっており、同じ地域内でもカテゴリーごとの実績が大きく分かれうるということだ。